中短ミュージカル30年史

寺　川　悦　男

〈目　次〉

序 …… P 8
1　新潟中央短期大学ミュージカル（以下　中短ミュージカル）の概要 …… P 8
- 趣旨
- 本学の理念・目的との連関性
- 状況
- 評価
- 意義
- 取組実績
- 特色
- 「特色ある大学教育支援プログラム」採択
- 「特色ある大学教育支援プログラム」評価員からの採択理由

2　中短ミュージカル　縁起 …… P12
3　黎明期　第１回～第３回芸能祭 …… P14
4　草創期　第４回～第６回芸能祭 …… P16
5　転換期　第７回～第９回芸能祭 …… P18
6　発展期　第10回～第15回芸能祭 …… P20
7　結実期　第16回～第20回中短ミュージカル …… P23
- 平成15年度「特色ある大学教育支援プログラム」採択までの経過
- ヒアリングプレゼンテーション用原稿
- 採択内定の知らせを受けて
- 新聞記事

8　定着期　第21回～第24回中短ミュージカル …… P34
9　最演期　第25回～第29回中短ミュージカル …… P37
10　30周年記念　第30回新潟中央短期大学ミュージカル …… P42
- （制作・上演スケジュール）
- （30周年記念ミュージカルテーマ）

11　あとがき …… P45
12　参考文献 …… P46

序

新潟中央短期大学ミュージカル第30回記念公演「私の大切なもの～マツユキ草の奇跡」が二会場で開催された。詳細は後述するが、加茂、新潟、両公演とも多数の来場者による拍手・声援に恵まれ、盛会裏に幕をおろすことができた。これはひとえに本学教職員、ならびに共演した地域の子どもたち、並びに関係者の協力によるものと捉えており、本取組を推進してきた一員として感謝に耐えない。「おかげさま」の一言に尽きる。

本取組が30年を経過した現在、これを一つの区切りとして、これまでの歩みを振り返るべく、本稿を起草する。

1　新潟中央短期大学ミュージカル（以下　中短ミュージカル）の概要

この教育活動は、単なる芸術教育の領域にとどまらず、学生の保育・幼児教育に関する知識・理解の深化を促進すると同時に、彼らの人格的成長に大きな教育効果を挙げているという視点からその概要を記述する。

（趣旨） 本学では、昭和61年以来毎年「新潟中央短大ミュージカル」の呼称で、学生主体の芸能発表会を開催している。この発表会のプログラムは、「ミュージカル」と「リズム体操」を二本の柱として構成し、前者を２年次生が、後者を１年次生が演ずるという形式で行われている。いずれも学生全員がそれぞれ何らかの役割を分担して参加するという全学態勢を最大の特色としている。当初、「ミュージカル」は保育に関する総合学習の場として設定したものである。世界の名作や創作シナリオのうちから学生全員で一つのミュージカル作品を共同制作することによって、幼児の心性、行動心理に関わる知識理解を体験的に深め、保育者としての実践的指導力を高めようとするねらいのものである。特に平成13年度からは､教育職員免許法の改正に伴って新たにカリキュラムに加えられた「表現活動指導法」の授業をこの教育活動の基盤として行っている。

（本学の理念･目的との連関性） この取組と本学の理念･目的との連関性については､「業学一如」ならびに「豊かな知性と情操、積極的な奉仕精神と実践力、地球社会、我が国及び地域社会の福祉に貢献する人材の育成」という本学の教育目的、目標に文字どおり合致しており一定の実績をあげている。この教育活動の決定プロセス、及び組織的対応に関しては、いずれも本学における意志決定手続きを経て決定され実施されてきた。すなわち、月例の幼児教育科教員による学科会議において提案、付議され、成案を得たのち教授会における審議を経て決定されている。

一方、学生たちは本ミュージカルを制作・上演する過程において、集団の中で自分に与えられた役割を自覚しながら、観客の反応を想定した構成と技法を、試行錯誤を重ねながら追求する。これはそのまま保育士に求められる思考、能力、技法に結び付くことになる。

（状況） 上演会場は、地元の加茂文化会館（収容定員千人）を中心に入場無料で発表し評価を仰いでいる。来場者は、地域の子どもたち、その両親、一般市民、学生の保護者、本学の卒業生、など老若男女様々である。また、上演に際して市の教育委員会、公共放送局、新聞社等の後援を得ており、マスコミ各機関からも制作過程や上演での反響を好意的に報道していただいている。その結果、近年の来場者は午前午後の２回公演とも常にほぼ満員の観客数が示すように、地域社会から好評を博している。また、学生に対する教育効果も期待以上のものがあって、今日では本学の欠かせぬ大行事であり、創造的な教育活動になっている。上演所要時間は、「ミュージカル」が約１時間半、「リズム体操」が20分、そしてその間をつなぐ「ぬいぐるみショー」や休憩をはさみ、全体で約２時間である。

（評価） この教育活動・文化活動がもたらした意味は、次の２点に要約される。

その第一は、もしそれがなければ発現しなかったであろう、学生一人一人の潜在的能力を引き出すことに成功したことであり、第二は、学生たちが自助努力によって困難を乗り越え、連帯関係のなかで自分の役割を果たした体験が、学生たちに生涯に及ぶ感動を生み出していることである。この取組が成功することによって導かれる感激や帰属意識の高まり、自信と誇りの深まり等の教育効果は何ものにも代えがたいと評価している。こうした学生たちの意識向上の表れを見ることができることはまさに、教師冥利につきることであり、毎年のこの取組が、苦労を忘れて没頭させられ、それが30年間の実績につながった大きな要因だった。練習・制作過程では、教科主義ではなく各々の教員がそれぞれの領域に捉われず、学生と一緒に議論を重ねながら完成度の高い舞台を作り上げていく。学生はその現場に加わることで、「ものをつくる」ことの真の意味を実感し、彼等の卒業後の職場、保育現場でそれを活かすことになる。

（意義） 戦後教育の悪しき風潮の一つに「結果の平等」が上げられる。幼稚園や小学校の運動会の徒競走でみんな手を繋いで一等賞、などに見られるような、負ける子が傷つくのを恐れるあまり、競争を避け、それによって挫折を感じさせないようにする風潮が家庭や教育現場で見受けられる。ただ、挫折、葛藤、悩み、混乱は、人間社会の中で誰もが経験することであり、それを回避することはできない。それ故、私たちは、それをあるべきものとして積極的に受け入れ、むしろそれを克服することに、より大きな意味を見出してきた。学生たちはこの取組を通して、仲間たちとの共同作業等のいろいろな場面の中で必

然的に生ずる挫折・葛藤・混乱を感じ、それを克服している。これこそこの取組の意義である。換言するならば、私たちが重要視しているのは完成度の高い舞台という結果ではなく、プロセスそのものである。つまり、主体である学生が、机上の学問ではない制作の現場を踏みながら経験する挫折や葛藤、また、他者との関わりを通して人間的に成長していく過程にこそ、この取組の意義を見出している。

（取組実績） 本学幼児教育科を卒業する学生に「在学中いちばんの思い出は何か。」と問えば、大方が「それは何といっても『中短ミュージカル』です。」と決まった答えを返してくる。このように本学のミュージカルは、今日、全学生の脳裏に鮮烈な印象を焼き付けている伝統行事である。そのミュージカルも過去30回の歴史の中で決定プロセスや練習、制作の過程をとおして、指導する教員と出演する学生たちはそれぞれに何度か大きな挫折を経験した。上演できるかどうかの危機もあったが、そのつど学生たちのエネルギーと教員の熱意はそれを凌駕し、このミュージカルに関係する全員がより一層の感動を体験することができた。「舞台は人生だ」と言った人がいたが、まさにそのとおりで、涙、笑い、怒り、喜びそして挫折と混乱を私たちは感ずることができた。こうした経験は机の上だけで学べるものではなく、私たちはそれを誇りにしている。ご来場の地域の子どもたちには劇場で観る生の舞台のおもしろさを感じていただき、演ずる学生たちには生涯にわたる思い出と達成感を、そして指導する教員には若々しい学生たちとの共同制作の過程と発表の場で学生一人一人の新たな息吹と大きな可能性を見出して来た。

（特色） この活動の特色は次の２点に要約される。

第１は、これが全教員学生をあげての取組になっている点にある。２年制の幼児教育系短期大学においては、履修科目数、実習等の関係もあり時間的な余裕もなく、これだけの本格的規模のステージを完成させるには､全学をあげての体制づくりが必要だからである。役割分担については学生の自主的な決定と実行に委ね､教員は助言者に徹している。練習･制作過程では、教科主義ではなく全教員がそれぞれの領域にとらわれず学生と一緒に議論を重ねながら完成度の高い舞台を作り上げていく。学生はその現場に加わることで「創造すること」の真の意味を実感することにより実践的指導能力を高め、幼児教育の現場でそれを生かすことができる｡学生の人間的成長に多大な教育効果をもたらしているのである。

第２は、このミュージカルが過去30回の上演をとおして、単なる学校行事ではなく地域と密接に結び付いた文化、芸術イベントとして定着し評価を得ていることがあげられる。近年では加茂市内の小中学校の総合学習の担当教員から、ミュージカルの制作・練習現場を見学する体験学習の協力依頼も受け、実現している。また、来場者による公演後のアンケートを見ても「素晴らしかった。来年も観に来たい。楽しみにしている。」というよう

な感想を頂いている。そうした声を参考に、平成15年の第18回公演以降から、地域の子どもたちとの共演も実現し、学生との交流もますます深められている。このミュージカルを通じて、地域の方々は本学を教育熱心な短大と好意的にとらえており、また、彼等とのコラボレーションの成果は本学が地域に根ざしているという証でもある。

30年前に始めたころは、観客である子どもたちにどのような出し物を提供できるか試行錯誤の連続であった。合唱、合奏、独奏や紙芝居、劇、などを舞台にのせてはみたものの観客である子どもたちの反応はもう一つ盛り上がりに欠けた。プロの集団ではない幼児教育科学生たちが演ずるわけなので、意欲と若さはあるものの、技術的に拙いところもあり、観客である子どもたちに演目内容の面白さが伝わらなかったとしても無理からぬところであった。そうした中で第２回目からプログラムに加えられたミュージカルの面白さは、演ずる学生たちと鑑賞する子どもたちの心をとらえた。歌や踊り、舞台美術や照明は素晴しい劇場での臨場感を伴い、多くの観客からの温かい拍手と声援を受けつつ現在に至っている。「加茂市の誇りだ！」とまで褒めたたえる支援者がいるほど地域社会に定着しており、そうした声は年々増加している。また、平成15年からの試みとして実現された幼児、児童との共演も回を重ねるごとに増加の一途をたどっており、参加希望者数の制限を加えなくてはならないほどに膨らんでいる。一方、年々増加する来場者数に対応するために、平成16年から午前・午後の２回公演を実施しているが、それでも客席は常に満席の状況であり、その一事を見ても地域の本学ミュージカルに対する期待はますます高まっており、加茂市に咲いた新しい文化と言っても過言ではない。現在の課題は、ここまで膨らんできたこの文化事業が、すでに短大単体の能力を超えている点が上げられており、この事業を継続するためには運営の適正化が必須条件として求められている。

上述したように本学は80人定員、専任教員11人の小規模な単科短期大学である。制作・上演は常に綱渡りの状況の中で実施されてきており、創造すること自体の喜びは論を待たないが、こうした状態がいつまで続くのか一抹の不安を抱いているのが実情である。ただ、四半世紀を超えたこの活動に対して、本学への進学希望を持っている学生たちや地域からの期待に応えること、ならびに新潟県小都市の新しい文化の創造を継続させることが課せられた責務であることを考える時、この取組を簡単に放棄するわけにはいかない。これからも、本学が為し得る具体的な地域貢献として、全学態勢で寄与することを目標に力を合わせて制作・上演に向かって歩を進めていかなくてはならないと改めて思う次第である。

「特色ある大学教育支援プログラム」採択

本取組のハイライトは平成15年度文部科学省第一回「特色ある大学教育支援プログラム」に採択されたことにある。これはそれまでの18年間の実績が公的に認められたことであり、これによって県内にも広く本学の存在が認知されることになった。少なくない補助金を交

付されたことも大きかったが、何よりも知名度が上がったことが学生募集上の効果につながり、定員増の実現に対する大きな要因になったと判断している。その結果、平成20年に、50人定員から80人定員に移行させることを可能にした。

「特色ある大学教育支援プログラム」評価員からの採択理由

「この取組は、優れた表現能力を備えた保育者を養成する上で、適切かつ優秀な総合的教育活動として評価できます。実は、類似の活動は多くの短期大学でも見られるところですが、この取組が非常に小規模な単科短期大学によって18年間の持続的な実績を重ねている点が注目に値します。ごく限られた人的資源を最大限に活用している努力が窺えます。また、地域社会によく受け入れられ、地域の学童多数の共演を得て貴重な文化を形成している等、地域密着型の短期大学のあり方を示す好例と言えます。今後も地域社会とのコラボレーションを多面的に進めるとともに、制作面での学生の主体的参加を一層促す等、さらなる発展を期待します。」

平成16年度以降もこの採択理由を真摯に受け止め、このミュージカルこそが本学の特色との認識のもと、悪戦苦闘を重ねながら、第30回までこぎつけている。今後もこの経験をもとに、私どもに課せられた使命を継続させることにより、新しい地域文化の創造に寄与したいと考えている。

２ 「中短ミュージカル」 縁起

加茂暁星短期大学（新潟中央短期大学）幼児教育科の音楽教員として新採用された筆者が、当時幼児教育科長の水沢昇教授から、何か新しい芸能行事を企画してくれないかと相談を受けたのは昭和61年４月であった。学生たちが授業の単位取得を中心に小さくまとまり、教育活動全体として盛り上がりに欠ける点が否めないので、彼らの情熱をかき立て、彼らを熱中させるような芸能行事を啓発して学科を活性化させたいというのがその理由であった。水沢は昭和56年に幼児教育科が開設された時から関わってきた古参教員である。前年半年間の非常勤講師を経て、その年専任教員に就任したばかりの筆者に新風の担い手たることを期待したのである。音楽の領域では、以前から器楽や歌唱の学内発表会は行われていた。しかし、それらは正課の授業の一環であったから成績評定につながり、個別的で堅苦しく、学生たちが伸び伸びと自分を発揮して青春を謳歌する世界には隔たりがあった。求められているものは、学生全員が活き活きと参加する芸能行事であり、ひいては対外的に幼児教育科の存在をアピールする学科行事である。何をどのような形で舞台に載せることができるか、その思案が容易に定まらないうちに夏休みが来た。

幼児教育科は昭和57年度から二年次生のゼミ単位で夏季休業期間中に「ゼミ旅行」を実施していた。その年､寺川ゼミの行き先は長野県北安曇郡白馬村の音楽ペンション｢ブルーベル」であった。ロビーに設置してあったピアノの上に数冊の本が置かれていた。何気なく手に取った一冊の表題を見て一つのひらめきが走った。表紙に「ピアノ曲集　音楽物語『窓際のトットちゃん』」とあり、作・黒柳徹子、構成・飯沢　匡、作曲・小森昭宏となっている。それは当時ベストセラーとなって評判を呼んだ高名なタレント作家の自伝的小説を児童向きの音楽劇に仕立てたものであった。情景をピアノ演奏（独奏・連弾）で舞う子どもたちの遊戯で表現し、プロットをナレーションでつなぐという構成である。筆者は即興でいくつかの小曲を弾きながらある構想が芽生えた。

（参照　「新潟中央短期大学三十年史」）

秋、幼児教育科の学科会議は筆者の構想に賛同し、加茂暁星短期大学から新潟中央短期大学への名称変更のイメージアップを図るべく本取組を開催することに決定した。その席上で筆者が力説したことを以下に記述する。

「学生たちは若い。エネルギーの発露を求めている。それをどのような形で表すか、それは私たち教員に与えられた課題だ。私は音楽教員としてその課題を真摯に受け止め、本取組の実施を提案する。ただ、本学学生は幼児教育科の学生であり、音楽科の学生ではないので音楽的素養もそれほど高いとは言えない。専門的な歌唱、演技、ダンスの指導を受けてはいない。しかし、彼らの潜在能力を信じて発表の場を与えることは、必ずや学生たちの資質向上につながる。一片の知識より、自身の体験が重要な意味を持つ。歌の世界でよく言われることは、10回のレッスンより一回の舞台で学ぶことのほうが多い。舞台経験こそ何より重要なことと考える。一方、視点を本学存続に移すならば、少子化という社会的趨勢を背景に陥る学生募集上の困難を解消するためには、新しく校名が変わったことを県内に広く知ってもらわなくてはならない。また、それは新潟県と本学との密接な結びつきを印象づけるものとして受け止められる必要がある。本取組は、舞台を通じて子どもたち、ならびに保護者、ひいては地域の方々から好意的に受け止めてもらえると信ずる。ましてや、舞台に上がる学生たちはもとより、地域の子どもたちからも『新潟中央短期大学』という名称を各々の体験から覚えてもらえる。それどころか、観客として来場した子どもたちが、将来本学に進学することも考えられる。経済的に許すならば、長い期間それを継続することにより本学のイメージアップが図れる。」

上記の筆者の提案に反対する意見はなく、商学科、幼児教育科、合同の教授会でも承認され、第一回「芸能祭」は、以下の日時、場所、プログラム内容で加茂市教育委員会の後援を得て「加茂文化会館」で開催された。以下はその詳細として述べる。

３　黎明期　第１回～第３回芸能祭

第１回芸能祭　昭和62年１月17日(土)

プログラム
- 合唱　「流浪の民」「四季」
- 劇　　「和尚さんと小僧さん」
- 独唱　「童謡メドレー」
- リズム体操　「ミッキーマウス体操」
- **音楽物語「窓際のトットちゃん」**

前段で述べたように、本学学生による舞台制作･上演の意義が薄らぐことはなかったが、プログラムを組むにあたっての筆者による企画は上記のようなものとなった。メインは、最後の音楽物語「窓際のトットちゃん」であることに疑いを持たなかったが、それを形にする上で学生たちに意見を求めたところ、ピアノ演奏に合わせた寸劇上演形式の舞台が提案された。この時点では、筆者の専門の音楽を中心とした演目が大半で、学生たちの舞台への関心度も高くなかったところから、今になって振り返ると、指導する側の強引さが目立っていたのではないかと自戒している。ただ、舞台そのものは大きな失敗もなく、出演した学生たちの満足度もそれなりに高かった。約600人の来場者からの満足度も､アンケートを見る限り第一回目としては上々の結果をもたらした。

第２回芸能祭　昭和62年10月31日（土）

プログラム
- 合唱・合奏　「おもちゃのチャチャチャ」など
- 影絵　　「くまさんのてぶくろ」
- ピアノ連弾　「ブラームス・ハンガリア舞曲」
- **オペレッタ　「白雪姫」**
- リズム体操　「人間っていいな」など

昨年の成功を受けて第2回も同様の経験を学生たち、ならびに地域の子どもたちに提供するべく苦心したが、内容そのものは前回同様、音楽的なものに偏っていた。理由は指導者の中心が音楽教員だったためである。子どもに人気のある出し物は何かという一点に絞ってプログラムを作ってみたものの、前半の演奏を聴かせるといった、音楽会的な出し物は演奏している学生たちはともかく、観客である子どもたちには今一つ受け入れてはもらえなかったようである。そうした中で、一番の反響をよんだ出し物は、オペレッタ「白雪姫」であった。そこまでざわついていた場内（来場者700人）は、水を打ったように静まり、白雪姫の可憐さにどよめき、７人の小人のしぐさに笑い、はたまた毒リンゴを白雪姫に与えるおばあさんの登場に、恐ろしくて泣きだす子どもまで出る始末であった。舞台と客席は完全に一体化し、大詰めでおばあさんの死が来るや、子どもの一人が「やった、やった！」と叫ぶに及んで客席の興奮は最高潮に達した。

内容は良く知られている童話を短縮させ、音楽も幼児・児童向けのシンプルなものを制作した。歌や踊りにピアノ伴奏をつけただけのもので、出演学生たちの練習量も少なかったため稚拙な部分も目立っていた。それ故、舞台に載せるまでこのような反響を呼ぶとは正直思ってもいなかった。しかし、見方を変えると、どんなにシンプルであろうと、また出演者の芸が稚拙であろうとオペレッタは、文学、音楽、美術、照明、舞踊が一体化したものであり、それらの相乗効果もあいまって観客に大きな関心を与えることは必定であり、その成功は約束されたものであった蓋然性は高かったと振り返っている。

また、この年から寺川主導の制作陣に美術担当の星野健司、体育担当の坂内寿子が加わり、他教員も積極的に関わる意識の高まりとともに全学態勢が固まりつつあった。

第３回芸能祭　昭和63年12月17日（土）

プログラム
- 合唱・合奏
- 紙芝居
- ぬいぐるみ劇
- ピアノ連弾「ブラームス・ハンガリア舞曲」
- **ミュージカル「マッチ売りの少女」**

• リズム体操　「メリーポピンズ体操」「ジャングルダンス」

昨年の成功に勇気付けられ、第３回のプログラムには必然的に、プログラム上はミュージカルとしたオペレッタを演目に載せた。演目は、先回の教訓を踏まえた上でより高度なものを載せたいという意図から「マッチ売りの少女」が選ばれた。このよく知られた演目は、最終的に主人公の死が描かれる悲劇であったため、先回ほどの反響を呼ぶことはなかったが、学生たちの意識の高まりと、それに伴う練習時間の確保を得ることができたため、総合的には前回を上回る出来栄えに仕上がり、それなりの成功を収めることができた。

４　草創期　第４回～第６回芸能祭

第４回芸能祭　平成元年10月22日(日)
プログラム　創作ミュージカル「ぼくはスサノオ」（リズム体操等の演目は以下割愛する）

黎明期の３回までを総括した上で、第４回目の出し物を何にするかという段になって、はたと困った。前回までの成功を受けてミュージカルを演目の中心に据えることは教員、学生の意思として固まっていたためである。結論を先に述べるならば、学生が千人規模の舞台に載せる適当な作品が見当たらないのである。幼稚園・保育園児が演ずる小規模なものはある。もちろん、相当修練を積んだプロのためのエンターテインメント的な色彩の強い作品もある。しかし、50人定員の小規模短期大学の幼児教育科学生たちが演ずる作品は極めて少ない。存在するかもしれないが出版されていない。それなら、原作・台本・音楽・舞踊にいたるまで総合的に作ってしまうことを考えたのは必然的な成り行きであった。

そこで、第4回芸能祭で初めて完全創作ミュージカルを全学態勢で制作・上演することとなった。演目は、日本神話を素材とした「ぼくはスサノオ」という作品で、原作・台本が星野健司、作曲・音楽指導が寺川悦男、ダンス・振り付けが坂内寿子と本学教員の３人が主たる指導者として各々の持つ授業時間、ならびに放課後の特別練習をとおして指導に当たった。上演時間90分、出演者数は器楽班も含めて85人と大掛かりなもので、予期したことではあったが、その日来場した子どもたちを熱狂的な興奮に包んだ。ストーリーの分かりやすさ、オロチ退治の怖さ半分、痛快さ半分のドラマチックな内容が大受けしたのである。中短オリジナルミュージカルの金字塔として位置づけられる作品といえる。

こうした成功を受けて、本取組は、この年から例年千人規模の大観衆を集める地域の名物行事となり、幼児教育科に欠かすことのできない伝統行事となった。

第５回芸能祭　平成２年10月14日（日）
プログラム　創作ミュージカル「猿の王様」

第４回芸能祭で取り上げた創作ミュージカル「ぼくはスサノオ」の成功を受けて、今回も同様のプロセスを踏んで本学独自のミュージカルの創作を試みた。原作は「美女と野獣」をモデルとした台本を星野健司、作曲・音楽指導が寺川悦男、ダンス・振り付けが坂内寿子の３人が、ともすれば強引に学生を引っ張っていった。特に筆者は、これまでの経過から学生の自主性をあまり考慮に入れず、舞台の完成度を高めるための指導を行っていった。例えばそれは、キャスト選定に積極的に意見を述べ、音楽的にそれほど優れていなかった学生を入れ替えるなど、教育的批判を浴びるようなことをしたため学生たちのみならず一部教員からも芸能祭実施に関する疑義が生じた。学生たちの希望のみを重視することは、第三者（観客）からの視点を考慮しないことにつながり、舞台の成功はおぼつかないとの舞台制作における基本的スタンスの違いから生じたものと覚えている。すべての学生たちに光を当てたいと思うものは教員として当たり前のことであったが、学生たちの望みは自分がやりたい役をやるというどちらかといえば自己中心的なものであるように当時は受け止めたことと、時間的制約を解消する上でもなかば強引に実行したため、それを中心的に進めていた筆者に周囲からの非難が集中した。配役と個人の持つ資質がそぐわなければ観客からの満足度は得られないであろうという筆者の思いと、演じたい役柄にこだわる学生の思いとが正面切ってぶつかった結果だったように思う。ある時は、役を変えられた学生を中心に、様々な学生からの鋭い詰問が浴びせられたが、一方では筆者のやり方に同調する学生も少なからずおり、制作中に混とんとした状態が続いた。その結果、一部の教員からは芸能祭の中止を発言する者も現れる始末だった。

ともあれ、さまざまな軋轢はあったが、最終的には上演時間約２時間のミュージカルは、観客からの一定の評価を上げ、なんとか幕を下ろすことができた。しかし、学生への教育的指導と観客の満足する舞台制作・上演のギャップはこの後も引きずることになる。

第６回芸能祭　平成３年10月27日（日）
プログラム　創作ミュージカル「おしいれの冒険」

先回の、筆者のなかば強引とも言える手法を和らげるため、新しい試みとして学生からの脚本参加ならびに舞台設定等、新機軸が加えられた。しかし、先回の問題点は未解決のまま今回も引きずっていた。制作・上演をする上で、舞台を作る主体である学生たちの意見を入れながら、なおかつ舞台の完成度、つまり観客の満足度を上げるべく制作したが、学生たちの思い描くものと大舞台での上演は、おのずから相容れないものがあったよう

だ。学生たちの感性の豊かさは認めるところではあるが、それはあくまで小規模のものに限定されており、千人を収容する大劇場での上演ということになると、経験不足から生ずる視界の狭さが露呈する。学生たちの思い描いているような、例えばアニメーション手法の舞台転換は容易ではなく、出演者の技術不足も散見された。指導教員はそうした事実を踏まえた上で学生の満足度と観客の満足度が調和するように、度重なる議論と練習を忍耐強く行っていた。結果は観客の拍手と声援の中、無事幕を下ろすことができた。

５　転換期　第７回～第９回芸能祭

第７回芸能祭　平成４年５月24日(日)
プログラム　創作ミュージカル「みつばち　マーヤの冒険」

ここまで来ると指導教員側にも、学生と観客という二方面を見据えた解決策が求められることになる。教員側に託されていたイニシアチブが、今回は、それが学生側にシフトされた。その結果、出来上がったものが今回の上演であった。例えばそれは、学生の意見と希望を十分に取り上げるべく、主人公マーヤを希望した学生３人の意思を尊重したため、その３人を幕ごとに入れ替えるという苦肉の策をとった。

学生の意見・希望は全面的に取り上げられたので、学生側の満足度は高かったように思うが､幕ごとに主人公が変わるという不自然さが観客からの理解を得ることは難しかった。しかし、舞台そのもの完成度を全体的に見るならば、今回から、照明･音響の専門会社「新

潟照明技研社」からの協力も得られたおかげで、レベルアップしていると受け止められた。

第８回芸能祭　平成５年５月23日（日）
プログラム　創作ミュージカル「オズの魔法使い」

学生側にシフトされた結果は、台本選定をはじめ学生の積極的な関わり、制作・上演意欲の増大につながった。その結果、選ばれた演目が「オズの魔法使い」であった。学生たちは、こどものミュージカル（ドレミ楽譜出版社）から同名のミュージカル楽譜を筆者の研究室に持ち込み、それを土台として自分たちで話し合いながら、学生約70人が活躍できるようなミュージカルを作り上げた。伴奏は数年前から筆者が始めたコンピュータソフトを使って、オーケストラ風にリアリゼーション化したものをバックに、それぞれの場面の肉付けがなされていった。

この作品はストーリーも簡明、かつ教育的にも優れたもので、脳のないカカシ、心のないブリキ、勇気のないライオンという特異なキャラクター設定とあいまって大成功を収めた。転換期を代表する演目だったと総括している。

広報面に視点を移すと、毎年、制作・上演の様子を文化面等で取り上げてくれている新潟県内各新聞社をはじめ、加茂市月報にも大々的に写真入りで紹介されるなど、新潟県民、加茂市民には中短ミュージカルの存在が強く印象付けられた。同時にそれは、観客動員数アップに大きく働いた。

第９回芸能祭　平成６年５月22日（日）
プログラム　創作ミュージカル「ピーターパン」

先回の成功をもとに、今回も学生からの提案で「ピーターパン」が選ばれた。ディズニーアニメーション等で広く知られているこの物語を、本学風に作曲・編曲等のアレンジを加え、ミュージカルに仕立て上げた。過去の実績を踏まえた上で、学生たちの意欲はますます高まっていた。キャスト選定方法もオーディション形式で行われた。学生主体と観客からの目を意識したもので、当初、主役をやりたい学生は話し合いかじゃんけんで決めるこ

とも提案されたが、学生たちはより良いものを作っていくためには教員を交えた選抜方法が求められた。その結果がオーディションだった。学生側から提案されたオーディションシステムは、緊張感を伴った教育的にも良い方法と受け止められたが、一方では希望した役につけなかった学生たちの目に見えない不満は若干のネガティヴ要素として存在していたことは否めない。しかし、それも完成が近づくにつれ、それぞれが役柄に沿った動きを見せるようになった。

一方、キャストのみならずスタッフも総監督はじめ、音響、大道具、小道具、衣装、メイク、会計、文書制作、等、を一人一役で受け持つことも軌道に乗り出し始めた。一年生も当日の会場係、受付、駐車場誘導、記録、等、これも一人一役で受け持ち、全学態勢の基礎が築かれた年でもあり、学生主体という大義名分に真実味が帯びてきた年でもあった。

6　発展期　第10回～第15回芸能祭

第10回芸能祭　平成７年５月21日(日)
プログラム　第10回記念ミュージカル「ぼくはスサノオ」

第９回まで試行錯誤を繰り返しながらも、なんとか継続されてきた本取組が早いもので10年目を迎えた。制作・上演のノウハウも大方受け継がれ、記念公演を迎えるに恥ずかしくない陣容が建てられていた。しかし、演ずるのはあくまでも幼児教育科の学生である。舞台制作のイメージは、テレビ的な、小さく平面的なフレームを基本として捉えているため、大劇場での設定とはそぐわないような考え方を次から次へ出してくる。そのため、指導教員との軋轢は常に生じていた。教員側もそうした学生からの舞台制作上の無理な要求等について、辛抱強く議論を進めた。また、「新潟照明技研社」担当者からの指導・助言も大きく作用し、現実的な舞台制作への意識の高まりも掌握し始めていた。

音楽、美術、ダンスも先回と同名のミュージカルがビデオとして残っていたこともあり、それを参考に学生への指導もより具体性に富んだものとなっていた。10年間の歴史の重みを改めて実感させられた。

毎年経験してきた軋轢・挫折・葛藤を通して出来上がった舞台。それに対する観客からの反応は、この記念ミュージカルに対しても、幸いなことに前回を超える高い評価につながった。

第11回芸能祭　平成8年5月25日（土）
プログラム　創作ミュージカル「不思議の国のアリス」

10年間の歴史を通して得られたキャリアが大きかったことはここで述べるまでもないが、より新しい創造を追及する姿勢は、指導陣、学生たちの意欲増大につながっていた。それはレパートリーの広がりにも関係していた。その結果、新しく取り上げられた作品が今回の「不思議の国のアリス」だった。この作品は水星社から発行されている「少年少女のための合唱ミュージカル　ふしぎの国のアリス」（台本・作詞　中山知子　作曲　越部信義）を骨子とし、それを中短ミュージカル風にアレンジしたものを舞台に載せた。

教員からの台本・作曲・ダンスの指導は、筆者ならびに星野、坂内があたったが、他の教職員も創作する上での喜びをもって全学態勢であたった。また、本学ミュージカルを5年間、支え続けたプロの照明家も、具体的かつ積極的な提言を舞台上では素人の学生たちに与え、舞台を色彩感のある美しい世界に染め上げていった。

第12回芸能祭　平成９年５月24日（土）
プログラム　創作ミュージカル
「くるみ割り人形」

今回も学生からの提案で、チャイコフスキー作曲のバレエ音楽をモチーフとした「こどものミュージカル　くるみ割り人形」が選ばれた。この作品は、（ドレミ楽譜出版社）から発刊されているもの

で、それを約80人の出演者が思う存分動けるような舞台にアレンジさせながら上演した。学生の意見としては、「これまでに上演されなかった新しいものを私たちの手で作りたい」という自主性がより前面に現れてきたものとして評価している。舞台に対する学生の情熱は高まりを見せており、主人公に対抗する「ねずみ軍団」を新たに登場させる劇的効果の高まりも印象に残っている。

第13回芸能祭　平成10年５月24日(土)
プログラム　創作ミュージカル「新ドン・キホーテ」

「これまでに上演されなかった新しいもの」という流れは、今回も表記の作品によって受け継がれた。内容は、良く知られている「ドン・キホーテ」を主人公とした独創的な脚本を星野健司が書き上げた。音楽は、スペイン舞曲風の音楽を中心として、サンチョやダルシネア、ならびに村娘たちの曲等を筆者がミュージカル風に仕立てた。今になって回想するに、それらは永遠に残るような作品とは言いがたいものではであったが、幼児教育科学生の表現活動の手段として、彼らが喜びを持って舞台上に表現させうる作品となった。

第14回芸能祭　平成11年５月22日(土)
プログラム　創作ミュージカル「おしいれの冒険」

本上演は、第６回の同名ミュージカルを学生たちの意見を取り入れながらより洗練された形での作品に仕上げた。「おしいれ」という密室空間から派生する子ども特有の冒険夢物語である。物語の草案は星野健司、作曲は筆者に委ねられたが、それを学生たちの創意工夫による改訂版ミュージカルとして上演された。今回も様々な問題を抱えての制作・上演であったことはこれまでと変わらなかったが、毀誉褒貶の中で無事幕を下ろすことができたのは、ひとえに支えてくれる多くの方々のお蔭と捉えている。

ところで、14回まで重ねてきた成果は、教育上はもちろんのこと、地域貢献、ならびに学生募集上の面においても大きく表れていた。新潟中央短期大学というと「ミュージカル」

を思い描くプラスイメージは新潟県内に広がっており、そのため観客動員数は毎回満員の状態が続いていた。こうした予想以上の状態は、来場者への対応という新たな課題とその打開策が求められることになる。

第15回芸能祭　平成12年5月27日（土）
プログラム　創作ミュージカル「ピーターパン」

制作・上演の課題と同時に、観客への対応は今回も解決を迫られていた。キャパシティー千人の劇場に溢れるほどの来場者が詰めかけた。立ち見はもちろんのこと、通路も観客が占有した。消防法に沿って会館側からもその解決が求められていたが、この時点では未解決のまま上演された。ただ、プラスに考えればこれだけ多くの観客からの熱い声援と拍手によって、主体である学生たちが燃えないはずはなかった。舞台の学生たちの熱演は観客あってこそのものであり、両者が呼応してすばらしい舞台が展開されたことは言うまでもない。

演目の「ピーターパン」は学生からの熱烈な要望によって決められたものであったが、幼児教育科に学ぶ学生たちの、主人公に寄せるあこがれは、本公演を通じて表現されることになった。「大人になんかなりたくない」というメッセージは、数年前から社会現象になっていたピーターパンシンドロームをミュージカルを通じて美化させていた。ただ、本公演ではそこに、大人になるという現実を見据えた終幕を添えて感動の舞台に仕上げた。

音楽面では、非常勤講師の川村壽男の存在が大きく作用した。彼の作風はこれまでにないジャズ風なアレンジを加えたもので、中短ミュージカルに新風を吹き込んだ。

この成功を受けて、本ミュージカルは学生からの上演希望第一位になるほど支持され、今後も形を変えて上演されることになる。中短ミュージカル発展期の掉尾を飾るにふさわしい象徴的上演として取り上げられる。結果としては上出来の上演と締めくくることもできるが、当時としてはさらなる発展を目指すこと、つまり加茂市以外での公演が求められてきていた。

7　結実期　第16回～第20回中短ミュージカル

第16回新潟中央短期大学ミュージカル　平成13年５月19日（土）
プログラム　創作ミュージカル「ぼくはスサノオ」

加茂市の公演を超えるもの、それは県都新潟市での公演を目指すことを意味していた。以前からその提案を筆者は内包しており、第４～６代学長西村香積にもことあるごとに相

談していたが、学生たちの実力面、学園側の経済面、等から先送りされていた事案であった。新しく第７代学長に就任した山本隆一郎にも提案続けていたところ、これまでの実績を評価され、念願であった新潟公演が実現した。会場は新潟市民芸術文化会館（リュートピア）劇場での初公演であった。県内では唯一無二の舞台演劇専門の洗練された劇場である。そこでの公演が実現することは、指導教員、学生たちに十分すぎる興奮をもたらした。その結果は本ミュージカル結実期をスタートさせるにふさわしい公演だったと結論付けている。スサノオ、オロチ、クシナダはじめ出演者全員が輝いていた。彼らが卒業した時、「この学校に入れてよかった。」といった一言は、個人的には教員冥利に尽きる思いを抱かせた。同時に、彼らは新潟中央短期大学卒業生であることを誇りに思って社会に羽ばたいて行ったことは言うまでもない。

第17回新潟中央短期大学ミュージカル　平成14年５月25日(土)
プログラム　創作ミュージカル「オズの魔法使い」

新潟公演での大成功は、新潟県内に本学の存在を広める上で、計り知れない効果をもたらした。しかし、それとは反比例するように観客への対応未解決状態は増大していた。今回も一言で言えば満員御礼だった。来場者の中には、「せっかく来たのに追い返すのか」と怒り出す方もおられ、そうした具体的なクレームへの対応に苦慮していた。その結果、残された解決策は公演回数を増やすこと以外考えられなかったが、幼児教育科の学生たちにその負担を強いることはなかなかできなかった。それでなくても大きな舞台に上がる興奮は、学生たちに極度の緊張感を与えることになる。練習段階で、過呼吸になって倒れる学生が連鎖的に出てきたことも気がかりだった。ただ、そうした

心配は杞憂に終わり今回も無事幕を下ろせたことは僥倖と判断している。

演出面では、トランポリンや気球の宙づり等の舞台上の仕掛けもアップさせたこともあって、結果はこれまで同様、観客からの拍手・声援に支えられ無事幕を下ろすことができた。

第18回新潟中央短期大学ミュージカル　　平成15年５月17日(土)
プログラム　創作ミュージカル「不思議の国のアリス」

詳細は以下に記述するが、本ミュージカルは、あらゆる意味において結実期のエポックを画する制作・上演であった。

まず、第一に上げなくてはならないのは、地域の子どもたちを共演者として舞台に載せたことにある。それにより、これまで以上の地域密着・貢献につながったと見ている。参加希望者は公募、ならびに小学校・幼稚園・保育園にも声をかけたところ、約40人の子どもたちの参加が実現した。出来栄え・華やかさ・話題性はこれまで得られたことのない舞台となった。そうした彼らとの練習風景は、テレビでも約５分間にわたって紹介された。

制作面においては、筆者をはじめとする３人のほか、新任の専任講師として制作指導に加わった村木薫の存在は、本ミュージカルに美術面での新しい風を起こし始めていた。トランプの図柄をバックスクリーン一杯に描く手法等、全体的に彼の舞台制作の姿勢は画期的な印象を与えた。また、新しく非常勤講師としてメンバーに加わった作曲家、斎藤竜夫の存在も大きく作用した。彼の本ミュージカルのデビュー曲「女王様に忠誠を」は、それが鳴り出したとたん、学生の表情が一気に高まったことを覚えている。こうした指導陣ほか、学生、子どもを合わせた総出演者数120人の大舞台が大成功を収めたことは言うまでもない。

一方、公的評価に関してのハイライトが当てられたことは特筆に値する。

この年、平成15年９月18日　平成15年度「特色ある大学教育支援プログラム」に本学取組「総合学習としてのミュージカルの制作と上演」が採択された。詳細は以下に記述する。

●採択までの経過

文部科学省の新規事業であるこの「特色ある大学教育支援プログラム」は、日本全国の大学・短大を対象に教育面で優れたトップ100を選定することを目的としたもので、私たちがそれを初めて知ったのは平成14年８月の朝日新聞の記事からだった。その衝撃的な記事を手に、筆者に申請を促したのは、その年退職された第７代学長山本隆一郎だった。このプログラムに本取組が合致することを見抜いた山本の慧眼は、本学のステイタスを上げることを可能にしたという意味において正鵠を射ていた。以下は本取組の申請担当責任者としての経過報告を当時の日記を紐解きながら記述する。

平成15年６月　第８代長塚学長から日本私立短期大学協会報告の中で、その応募に関してのインフォメーションがなされた。それと同時にウエブサイト等を通じて応募要領が知らされた。それを受けて、本学としてどのような取組で申請するかという中で、18年間という長年にわたっての実績等から「ミュージカル」が選ばれた。時は今、という思いで、文字とおり寝食を忘れ、３日ほどで急いで申請書を書き上げた。とにかく実績だけは十分あったので、書く材料には事欠かない。問題はそれをどのようにまとめるか、文才のない私にとっては簡単な仕事ではなかった。ただ、本学はチームワークがよかった。長塚学長をはじめとし、坂内、中島純助教授、村木、永井講師らが中心となっての補筆、加筆が行われ、おおよそ完成した。ただ、私はそれでも完成にはほど遠いと思い、この話を切り出した山本前学長のお宅まで何度かお邪魔して、文章の校正を仰いだ。締めきりぎりぎりまで文章と格闘し、ようやく間にあわすことができた。できあがった申請書は、経営大学のカラーコピー機を使い、事務長はじめ、事務方総動員で部数を整え発送された。

８月22日　申請書による審査発表の日。朝から緊張して事務室の電話を待った。予定では午後２時に電話がかかってくることになっていたが、午後２時を回ってもかかってこない。だめだったのかと落胆していたころ、３時過ぎ、本取組に対するヒアリング審査実施が電話で知らされた。早速、待機していた長塚学長はじめ担当委員でヒアリング審査にむけての対策を練った。

８月25日　ヒアリング審査に向けての予行練習を坂内、中島、両助教授、村木、永井講師とともに一日がかりで行った。印象に残っているのは、本取組のポイントを黒板を前に５人で議論したこと。

８月26日　ヒアリング審査当日　私と坂内、中島、両助教授と３人で会場のアルカディア市ヶ谷に向かった。当方の説明20分間のあと、10分間に８人の審査員から矢継ぎ早に、以下の質問が飛んできた。

① 教職員の組織体制について、10人という少数で十分な対応はとれているか。

② 学生は、この取組から学んだことを卒業後、どのように活かしているか。

③ 消極的、批判的な学生への対応はどうしているか。など

筆者としては、気負いもなく、あったがまま、思いのままを答えた。

９月12日　採択の知らせを受ける。高校訪問を終えて家に帰るなり、同輩の坂内助教授から「採択！採択！良かった！良かった！」と大分興奮された電話報告だった。

●ヒアリングプレゼンテーション用原稿

日時　平成15年８月26日　　場所　アルカディア市ヶ谷

本日は、私どもの取組に対して、このようにヒアリングを実施して下さいましてありがとうございます。私は、本取組の申請担当責任者で、新潟中央短期大学幼児教育科の学科長を務めております寺川悦男と申します。それから、教務委員長の坂内寿子、地域交流委員長の中島　純です。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは早速、申請書本文、ならびに用意させていただきましたファイルをご覧頂きながら、本学の取組について説明をさせていただきます。

お手元のファイルの中には、①第16回中央短大ミュージカル「ぼくはスサノオ」のプログラム、②チラシ、③上演当日ならびに練習風景の写真、それから、今年の５月に行われました、④第18回中央短大ミュージカルの新聞報道記事、⑤「驚く心」という詩、そして子どもたちにプレゼントした、⑥手作りおもちゃ、を用意させていただきました。

まず、はじめに、ビデオをご覧いただきたいと存じます。このビデオは、今年の５月15日にTBS系列のBSNという新潟のテレビ局が放送したものです。内容は、今年上演した第18回中央短大ミュージカル「不思議の国のアリス」の練習風景で、共演した子どもたちが司会をつとめる形で、本学のミュージカルを取り上げています。放送されたのは夕方６時半のニュース番組の中の特集として流されたものです。学生や共演した子どもたちの様子が、まとまった形で描かれていると思いますので５分間ほどですが、ご紹介致します。

―― ビデオ５分間 ――

さて、お話したいことは多々あるのですが、いくつかに絞って話させていただきます。まず、第一は、申請書本文７ページの写真のすぐ下にある部分です。読ませていただきます。[「舞台は人生だ」と言った人がいたが、まさにそのとおりで、涙、笑い、怒り、喜び、そして挫折を私たちは感ずることができた。」という部分についてです。

私たち教員は、常に、「教育とは何か」という問いかけを自分自身にしています。ある者は、それに対して「分け隔てをしないこと」と答えます。また、ある者は、大学人に多い、いわゆる専門バカのエゴイストを戒める意味で「献身」と答えます。そうした中で、私には、ある人がいった言葉が印象に残っております。その人曰く、「教育とは感動である」と言った一言です。それは、学生とか、教員とかの垣根を取り払って全員が共感すること

のできる一言でした。本学の取組は演目決定から、最後の後片付けに至るまで、各人がそれぞれにいろいろな場面で震えるような感動を体験することができました。

また、本文中の挫折についてですが、最近はもう見ることはないかも知れませんが、幼稚園や小学校の運動会の徒競走でみんな手を繋いで一等賞、などに見られるような、競争を避け、それによって挫折を感じさせないようにする風潮が家庭や、教育現場で見受けられました。ただ、挫折とか葛藤、悩みは人間社会の中で誰もが経験することであり、それを回避することはできません。それ故、私たちは、それをあるべきものとして積極的に受け入れ、むしろそれを克服することに、より大きな意味を見出してきました。学生たちは、この取組を通して、例えばオーディションや仲間たちとの共同作業等のいろいろな場面で挫折を感じ、またそれを克服しています。言い方を変えますと、私たちが重要視しているのは、完成度の高い舞台という結果ではなく、プロセスそのものなのです。つまり、主体である学生が、机上の学問ではない制作の現場を踏みながら、挫折や葛藤を経験しています。また、他者との関わりを通して人間的に成長していく過程にこそ、この取組の意義があると思うのです。

それではここで、今年行われたミュージカル「不思議の国のアリス」の上演当日の様子をビデオにしてありますので、ご覧いただきたいと思います。

―― ビデオ３分間 ――

（ビデオを流しながら）この中で子どもたちにプレゼントした手作りおもちゃを参考資料として用意致しましたのでこれについての説明を致します。本文６ページの写真にありますように中央短大ミュージカルはミュージカルを上演するだけではなく、ぬいぐるみショーやリズム体操そして、学生の手作りのおもちゃもこの催しの重要なファクトになっております。

―― がりがりの説明１分間 ――

次に、申請書本文７ページの最後の段落にあります部分を読ませていただきます。

「この教育活動がもたらした意味は三つある。第１は、もしそれがなければ発現しなかったであろう学生一人一人の潜在的能力を引き出すことに成功したことである。役割分担の自主・自治が見事に適材適所で実現していることは驚くばかりである。つまりそれは、チームワークの積極的学習である。制作過程においてスタッフやキャストはそれぞれのチームごとの自治による運営に任せている。その結果、一人一人の学生に責任感と仲間との連帯感を生じさせ、自己と他者との人間関係づくりを学ばせることができている。」

このことにつきまして、この取組とは直接関係はありませんが、参考資料として提示しました「驚く心」という詩をご覧いただきたいと思います。この詩は、審査員の皆様には

よくご存知のものだと思いますが、幼児教育者、倉橋惣三の詩です。

―― 読む。――

この詩にあるとおりのことを私たち教員はこの取組を通じて体験しております。授業中に見出せなかった、学生たち一人一人の潜在能力の発見、行事が成功することによって導かれる感激や帰属意識の高まり、自信と誇りの深まり等の教育効果は何ものにも代えがたいと評価しています。これはまさに、教員冥利につきることであり、毎年のこの取組が、苦労を忘れて没頭させられ、それが18年間の実績を重ねることができた大きな要因でした。最後になりますが、第16回中央短大ミュージカル「ぼくはスサノオ」の上演の模様をパネル、ビデオ、お手元のプログラム、写真等でご覧頂きながら本学の取組についての私の説明を終わらせていただきます。御静聴ありがとうございました。

――ビデオ３分間 ――

●採択内定の知らせを受けて（祝賀会での挨拶文）　　平成15年９月12日（金）

知らせを受けた時、いろいろな人の顔と彼らのことばが私の頭を次々とよぎりました。時間を忘れて、無我夢中で一緒に行動をともにしてきた人たち、応援してくれた人たち、無関心な人たち、そして、批判してきた人たち。そうしたいろいろな立場の方々の表情が浮かび上がりました。それと同時に、18年間の一回、一回の思い出が蘇ってきて、感情の高まりを抑えることができなくなりました。長年やってきたことに対して、認めていただいた今回の採択は、何ものにも代えられない喜びであり感激に打ち震えました。

今から18年前、私が本学に赴任した昭和61年、当時の幼児教育科の古参教員の水沢教授から「学生みんなの気持ちが高揚するような催しをやってくれませんか。」という申し出に「はい、喜んで。」と気楽に引き受けたのが、この取組を始めるきっかけでした。

当初は、学生たちとどんなことをやっていこうか、浮き浮きした気持ちでしたが、出来上がるのは頭で考えるほど簡単なことではありませんでした。学生の中には「何のためにこんな面倒なことをするんだ。」とあからさまに不満をぶつけてくる者もありましたし、一緒に作り上げる喜びなどとはほど遠い現実がありました。一方、直接関わりのない教員の方々は、「音楽の教員が一生懸命やることは良いことだし、頑張ってやれば。」くらいの軽い気持ちでおられたようです。そうした、ニュートラルな考え、もしくは我関せずの姿勢を決め込んでいた教員に対して、私は、幼児教育科の会議でこの取組の趣旨について、次のように述べたと記憶しております。「この取組を通じて、学生たちは燃えるでしょう。また、地域の方々は新潟中央短大の名前に親しみを持つでしょう。また、それを観に来た子どもたちは、いずれ大きくなったら新潟中央短大に入学することを考えるでしょう。」と、この取組のいろいろな利点を説きました。そうした私の主張に対して、ある教員の述べた

感想が印象に残っています。「中国人的な発想だ。何年後のことを考えることなどなかなかできない。」と言われましたが、真意は誉められているのか、けなされているのか良く分かりませんでした。

この取組を行っていく中で、考えさせられたこと、教えられたこと、それを一言で言い表すならば、「教育とは何か」ということでした。私が、先輩教員から面と向かって叱責されたことは、「あなたは、教育をなんと心得るか。分け隔てをしないことは基本だ。」また、他の先生からは「献身」、「感動」、「やってみせる」等の指導を受けました。そうした先輩教員あってこその採択と受け止めています。

この取組を通じて、私は学生たちを教育してきたつもりでしたが、それは私が勝手にそう思っていただけで、実は私自身が学生たちからいろいろと教えられていたのではないかと今になって思っています。私語をする学生、それは学生たちの教員に対する精一杯の抗議と受け止めています。そうした学生の声を代弁するに「何つまんないことやってるの、全然わかんないよ。分かるようにしゃべってよ。私たちがのめり込めるような問題提起をしてよ。」と、いうことではないかと判断しています。

ところで、この「プログラム」に応募したのは、全国の国公私立の大学・短大で、合わせて664件でした。その中から、私たちの取組が80件の一つに採択されたのです。今回のこの採択という成果を得られたのは、関係するすべての方々のお力によるものと、ありがたく受け止めています。18回のミュージカルを一緒に作ってきた、約1,300人に及ぶ毎年毎年の学生たち。そして、特に感謝しなければならないのは、加茂暁星学園に対してです。何故ならば、ここには自由にものが言える、やりたいことがやれる気風があります。努力が報われる環境にも恵まれています。また、個人名をあげると、今は退任され中央短大から去ってしまわれた星野教授、彼とは正に喧々諤々、口角泡を飛ばし汗と涙を流しながら作ってきた18回でした。また、坂内助教授、彼女は正に献身を絵に書いたような女性でした。彼女がいなければこの栄冠を得ることはできませんでした。それから山本前学長、先生には何とお礼を言ったら良いか分かりません。私と同じ年に、お互い縁あって中央短大に就任された先生は、ミュージカルを作っていく上での良き理解者であり、今回の申請書を作成する段階でも具体的な御助言をいただきました。そして、理事長はじめ役員のみなさまに重ねて御礼申し上げます

●**新聞記事**　　以下、朝日新聞に大きく取り上げられた記事を添付する。

学内総出でミュージカル

地域密着 地道に18年

新潟中央短大 教育支援プログラムに選定

朝日新聞　平成15年9月19日

第19回新潟中央短期大学ミュージカル　平成16年５月22日(土)
プログラム　創作ミュージカル「ヘンゼルとグレーテル」

長年の懸案だった午前・午後の２回公演を実施した第一回目の公演となった。それまで増え続けていた来場者への対応の具体化を図ったものであったが、当然ながら主体である学生たちとの間に大きな議論が交わされることになった。来場者カテゴリーは、出演学生の両親、親族、友人、地域の子どもたちの両親、親族、知り合い、中央短大卒業生たちとその友人、それと、もちろん純粋に本学ミュージカル上演を楽しみにしている多くのファン、ならびに支援者等に分類される。以上を合わせると少なく見積もっても1500人を超えることが予測できた。その上、「特色ある大学教育支援プログラ

ム」採択校という評判も上乗せされていたので、加茂市近郊を超えて新潟県全域および県外からの来場者もカウントせざるを得ない。２回公演実施の是非は喫緊の課題だった。

それに対する学生たちの意見は完全に２分化した。意見を集約すると以下の2点に絞られる。「私たちはプロではない。幼児教育を学ぶ学生である。２回公演をこなす余裕もないし、その意義も認められない。一回やれば十分だし、２回目は当然ながら感激も薄れる」と主張する学生も少なからずいた。しかし、一方では「私たちの一生懸命作ってきたものをできるだけ多くの方々に見てもらいたい。少なくとも両親と友達には見せたい。また、会館までお出でくださった方々に『満員ですから帰ってください』とはとても言えない。」

両者の意見は真っ向からぶつかったが、多数派を占めたのは後者の意見だった。並びに主催者である短大側の決断により２回公演実施が決定した。来場者にくまなく席を用意する手段は、整理券の発行等により午前・午後に偏りがでないよう配慮した。そうしたプロセスを経た結果は、２回公演とも800人と適当な人数となり、足を運んでくださった観客からの万雷の拍手の中、幕を閉じることができた。

制作指導面においては、先回から確定した５人の中核メンバーに加え、ダンス担当の中島孝子も坂内寿子を支える立場で指導に当たった。

こうして今回も、結果を見れば大成功と言える出来栄えに仕上がったが、それに付け加えて、ある男子学生が本番前に語ったことを記述する。

「私たち学生は、本番の結果よりも、そこに至るまでの練習過程において十分な満足を感じている。本番の成功の是非をここで述べることはできないが、ここに来るまでに学生間、先生方との話し合いの中でこの取組の意義を十分感じさせていただいた。本番でどのような結果が出たとしてもこの満足感が色あせることはない。ありがとうございました。」

この一言は、私たち指導陣に例えようもない熱い思いを抱かせた。

プログラムと整理券

第20回新潟中央短期大学ミュージカル　平成17年５月22日(日)
プログラム　創作ミュージカル「私の大切なもの」

この年、筆者が学長に選任されたため、制作担当責任者は坂内寿子が務めることになった。

演目は、ロシアの児童文学者マルシャークの児童劇「森は生きている」を原作としたものであるが、学生たちから持ち出されたその劇を、題名は「私の大切なもの～マツユキ草の奇跡」として村木薫と星野健司が脚色した。ほぼ完全な本学オリジナルミュージカルと言える。

20周年記念という前触れも響き、主催者である本学側もこれまで以上の公演を、という意気込みが学生側にも伝わり、制作段階のオーディション等から、ひしひしと伝わってくる熱気に包まれていた。共演者として参加したのは、地域の子どもたち35人のほか、その保護者たち５人も舞台に上がった。地域を巻き込んでの取組に完全に定着化したと言える。また、広報面においては、NHKはじめ地元放送局も番組内での紹介ほか、全国放送を本学で行いたい旨の申し込みを受ける。内容はミュージカルに関して若い学生たちとの「ふれあいミーティング」との触れ込みであった。また、「特色ある大学教育支援プログラム」採択校の公演を見学したいとのリクエストが大阪府や岡山県の短大からも届いた。

５月22日の本番は、午前・午後の両公演とも来場者多数のほか、NHKアナウンサーや上記の短大からも複数名が駆けつけ、大盛況のうちに幕を閉じた。結実期を象徴する記念公演に相応しい出来栄えだったと振り返っている。

８　定着期　第21回～第24回中短ミュージカル

第21回新潟中央短期大学ミュージカル　平成18年６月３日(土)
創作ミュージカル　「新・ピーターパン」

「特色GP」採択校という評判を受け、定員を超す学生たちのほか、子ども出演希望者数も膨らんでいた。地域の子ども50人、一般参加者７人の共演希望者を数えるに至った。制作内容について学生たちの練習姿勢は、ますます真剣味を増していた。例えばそれは、本学ミュージカルの特徴である集団群舞にも表れていた。音楽担当の筆者ならびに斎藤は、そこに合わせる音楽制作に毎年悩まされていた。しかし、窮すれば通ずる、の例え通り、学生たちが希望する音楽はなんとか出来上がった。舞台に上がる130人の出演者、並びに彼らを指導する教員側にも毎年それぞれのドラマがある。当然ながら様々なハプニングが起きる。本番も押し迫ったリハーサル段階でソロを歌う出演者の声が、疲労とこれまでに経験したことのない緊張感とストレスから出なくなった。急遽、その出演者と声が似ている一年生に彼女の代役としてマイクを渡し、観客にわからないように歌っているような素振りをさせながら乗り切るという離れ業も演じさせた。また、第１幕の最後に使ったドライアイスの影響で第２幕冒頭のインディアンの踊りで滑って転ぶものが続出した。出演学生が泣きながら「なんとかしてくれ」と懇願する。必死さが伝わるその様子を見て、早速、間奏曲を入れることを決め、その間に雑巾がけをすることに決定し急場をしのいだ。舞台上でのアクシデント・ハプニングはつきものだが、学生たちにとってみれば練習の成果がその一事によって失敗を招くことは何よりもつらい。何としても思いの丈を表現させてやりたいと指導陣も必死の思いで動いた。こうした努力はなんとか報われ、その結果は午前・午後の公演とも満員御礼。計2,000人に及ぶ観客からの拍手で幕を閉じた。

「ここまで来ると来年もレベルを下げられませんね」と同僚の村木薫が言っていたことが現実味を帯びてくる。終演後の打ち上げも感動の嵐で、学生たちは泣きじゃくっていた。教育とは「感動だ」との一言が改めて思い出される公演だった。

一方、学生募集に目を転ずれば、総受験生数に対する定員数50人は限界に来ていた。そ

のため収容定員増を文部科学省ならびに厚生労働省に申請することになった年でもあった。他大学が少子化から縮小傾向にある中での増員計画だったため、時の趨勢とは逆方向へ舵を切ることへの一抹の不安を覚えていたが、受験生数増に応えることは、地域からの要請と受け止め、それに対応する必然性が増していたと見ている。

第22回新潟中央短期大学ミュージカル　平成19年５月19日（土）
プログラム　創作ミュージカル「オズの魔法使い」

入学定員80人が認可された年である。とはいっても、それまでも約80人の入学生を数えていたため、定員増移行のためのミュージカル制作に関する問題は生じていなかった。

演目は第８回、第17回に続いて３度目の上演となる「オズの魔法使い」。同時に、専任講師として斎藤竜夫が就任し、本ミュージカルの作曲等、音楽担当責任者となってその責を担うこととなる。ミュージカル参加子ども数は70人を数えた。内容については、時代に合わせたせりふも多く、学生たちとともに手直しを加える中で、ヴァージョンアップされた面白いものができた。配役もそれぞれに練習の成果が表れている。魔女役の学生、光の妖精役等スター的な学生も多く、それぞれが見事な歌いまわしと動きで舞台を彩っていた。広報面においては、NHKテレビ等を通じて本学学生5人が公演案内のスポット出演をしたため、前宣伝としての反響が期待できた。また三条市や加茂市近隣の小学校からも総合学習の一環として引率教員とともに練習を見学に来るといった年でもあり地域に根付いた取組との評価もしっかり定着されてきた。

ただ、指導陣も寄る年波から生ずる疲労を自覚させられていた。そうした中で、子どもたちとの練習の帰り際に、子どもの母親から投げかけられた次の一言に救われた思いがした。

「素晴らしいですね。以前にも新聞の投書欄に投稿させていただきましたが、また、書かせてもらいます」とのことだった。深々と頭を下げさせてもらった。

本番午前の部の入場者数はキャパシティーを超える1,050人、午後の部では、950人あまり。大盛況のうちに幕を下ろすことができた。

第23回　中短ミュージカル　平成20年５月31日（土）
プログラム　創作ミュージカル「不思議の国のアリス」

ミュージカルの質を上げるための飽くなき向上心は留まるところを知らず、よりよいものを追及する姿勢に揺るぎはなかった。同時に、昨年から認可された学生数増に合わせた、より大掛かりな舞台も求められていた。しかしそれは、ともすれば短大単体の規模・能力

を超えるものになっていることへの疑心暗鬼を生じさせていた。

そうは言っても、加速度を増して動いている歯車（取組）は止められない。それを止めるには、それが始まった時の動力と同程度以上の力が働かなくてはならないのは自明の理である。ただ、それは後になって分かることであり、この時点では「まだ、まだ」という心理が勝っていた。その意味において、以前からの盟友、星野健司、並びに舞台俳優として中央での経験もあり、舞台芸術に造詣深い、斉木としや両氏を特別講師として招聘した。掲載した写真、ならびに動画を見ればわかるように、彼らの参入による舞台の奥行き感の深まり、躍動感の高まり等、作品全体の出来栄えは格段の進歩を見せていた。両氏とも学生からの信望も厚く、定着期を代表する公演となった。

第24回　中短ミュージカル　平成21年５月30日(土)
プログラム　創作ミュージカル「ヘンゼルとグレーテルと愉快な仲間たち」

前段に記述した、ミュージカル全体の質量に関する拡大･発展傾向は、ミュージカルの舞台参加の子どもたちにも波及され、その数は約80人と膨らんでいた。それは、本取組が地域に完全に定着した行事となっている証でもあった。

演目は、第19回に上演した表記の演目を５年ぶりに取り上げた。星野健司主導による演出面においては、舞台を３分割させる独自の手法等を取り入れ、時間軸と空間軸を交差させることに成功した。また、宙吊りやせり上がり、スモーク、ドライアイス使用等、舞台上の仕掛けも積極的に取り入れ、横軸中心の舞台に縦軸が加わることによる立体感をより鮮明に表現した。斎藤竜夫主導による音楽面では先回も評判になった「カラスのタンゴ」はじめ「コウモリダンス」等、中短ミュージカルを代表する曲をバックに展開される華やかな群舞とサック

ス等の楽器群による演奏に対して、観客からの賛辞が相次いだ。

総合的にみれば、中短ミュージカルの定番になった演目と言える。

９　再演期

第25回　中短ミュージカル　平成22年５月29日（土）
プログラム　創作ミュージカル「ぼくはスサノオ」

四半世紀、25周年記念公演の演目は、上演回数４回目を数え、すっかりなじみとなった「ぼくはスサノオ」に決まった。

周年記念公演ということから教員側から提案された本演目ではあったが、学生側からすると、これが本当に自分たちのやりたいものかどうかといった懐疑心を抱く声があがった。

以下の意見は、その当時、ある学生が述べていたことをそのまま記述するが、今後の制作・上演に対して投じられた一石とみている。

「先生方から提示された台本は面白いけど、私たちが考えたものではない。私たち主体のミュージカルではないような気がする」

学生あってこその舞台である。しかし、一方では観客あってこその舞台でもある。決して二律背反するテーマではないと思うが、この問題提起は、今後も念頭に置きながら取り組んでいかなくてはならないテーマと再認識させられた。舞台の仕掛けは流麗さを増すと同時に、観客からの歓声が上がる場面が所々に現れていた。次ページの写真は特に観客からの評価が高かった場面を並べた。

花吹雪舞うフィナーレ

リズム体操

第26回中短ミュージカル　平成23年５月28日(土)
プログラム　創作ミュージカル「ピーターパン」

上記の問題意識は、教員側に常に働いていた。主体である学生たちの意見を可能な限り取り上げることは、指導教員に課せられた職務と捉えられていたからである。そこで再演期として取り上げられた演目が「ピーターパン」であった。前述したように、幼児教育科に学ぶ学生たちにとってあこがれの演目であり、すでに上演回数４回目を数えている人気作品であった。しかし、制作過程における問題は例年と変わらずあり続けた。すでに一定の形を作り上げてはいるものの、出演者はその時の学生とは違う。ストーリーも学生たちのオリジナリティーを活かすための変更が加えられている。当然ながら音楽も変わる。一からの制作は毎年のことながら同様のプロセスを踏むことになる。しかし、筆者を含む担当責任者６人のほか、特別講師として招聘した星野、斉木コンビの働きは、以前の公演をしのぐ舞台を作り上げた。

見せ場である集団群舞や混乱を伴う戦いの場面も、客席にも入りこむ躍動感にあふれた舞台展開を見せた。全体の動きを掴みきれない学生、声の不調を訴える学生等、様々な問題が起こることにはもう慣れっこになっている。適切なる対処をしながら舞台を乗り切った。リハーサルでようやく格好がつくといったぎりぎりの状態も、むしろ快い緊張に変わっていた。本番は２回とも超満員。立ち見も２重、３重になっていた。例年通り、大盛況のうちに幕を閉じた。

第27回新潟中央短期大学ミュージカル　平成24年５月26日（土）
創作ミュージカル　「オズの魔法使い」

本演目も学生の人気度からいえば一、二を争う演目である。学生の人気演目上演の重要性は、教員側ともある程度一致するものの、彼らの求めるミュージカルのテーマは、ディズニー系、アニメ系等に偏っており、独自性という観点からは若干の相違点があった。しかし、本演目は第８回、第17回、第22回と三度にわたって上演されており、そのつど改訂を加え今回にいたっている。ある意味において、手馴れた演目であることに異議を差し挟む余地はなく、予想どおりの成功を収めた。魔女役学生の圧倒的な熱演や、それに伴う照明技法、ならびにスモーク、セリの使用等の舞台演出等、これまでの経験を踏まえた上での舞台展開を見せたことも付け加える。

一方、拡大発展を続けていた本取組ではあったが、平成23年、第11代学長に就任した馬場昭夫の意向から、ミュージカル規模の適正化が計られた年でもあった。

その結果、特別講師２名がその任務を外され、筆者、坂内寿子、村木薫、斎藤竜夫、の専任４人、非常勤講師の中島孝子、長川慶の２人による指導体制に移った。

第28回新潟中央短期大学ミュージカル　平成25年５月11日（土）
創作ミュージカル　「不思議の国のアリス」

昨年から見直されていたミュージカル規模の適正化に関して縮小傾向はあったものの、学生からの制作・上演意欲に変化はなかった。それどころか、本取組の実施を期待して入学を果たしている学生にとっては、指導陣の縮小等は関係ないことだったようだ。オーディションの様子はますます熱を帯びていた。

主役のアリスを希望するため名乗りをあげた学生は６人。彼ら一人ひとりの希望理由等の決意に耳を傾けたところ、真摯にその役を通じて表現する喜びを得たいというモチヴェーションの高さを受け止めた。そうした学生たちのミュージカルに対する意欲を聞くにつけ、学生主体のミュージカルが、名実ともに育ってきているとの実感を抱かされた。地域の子どもたちの参加もリピーターの増加に伴い、年々増加していることと相まって、学生たちの意識の高さは、そのまま練習、リハーサル、本番を通してすばらしい舞台を作り上げた。

第29回新潟中央短期大学ミュージカル　平成26年５月10日(土)
創作ミュージカル　「ピーターパン」

上演回数５回目を数える学生からの人気度ナンバー１の演目。演目決定の過程では、学生主体との名目を立てるため教員側はほとんど口を挟まず、学生たちの自主的運営を見ていた。台本、音楽、ダンス等、の大筋の舞台進行は全４回の記録をもとに固められていたため、後はそれを彼ら自身の練習で舞台に上げることができた。そうは言ってもこの大きな舞台をすべて任せるにはリスクが随所に隠れていた。そうしたリスク回避のための要点はベテラン教員陣の指導で乗り切っていった。さすが、本学の学生たち、その潜在的能力は高いものがあり、見事な舞台を作り上げた。これも29年の歴史を踏まえたものかと指導する側としても感嘆しきりといった状態だった。会場も午前午後とも満員。観客からの声もアンケート結果等から判断するに好意的な声が大勢を占めていた。

ところで、この年は思いがけない方面から本学学生への出演依頼が舞い込んだ。「BS日本の歌」への出演依頼だった。この番組は、NHKがBSを通じて全国的に放送している歌謡ショーで、全国各地を舞台に、放送時間もゴールデンタイムを１時間30分占有している

人気番組である。本学への出演依頼は、その週の舞台が加茂市だったことから生じたものである。

収録日、放送日等の詳細は、下記のとおりであるが、ミュージカルの経験と伝統を活かした本学学生たちは、喜びとともに舞台に上がり、のびのびと演技していた。

記

番組名　「NHK　BS日本の歌」
収録日　９月４日(木)
会　場　加茂文化会館
内　容　① オープニング「涙をこえて」　出演者全員とともに
②「おけさ歌えば」　当日歌唱　山内恵介
本学学生の役割　浴衣を着て盆踊り
③「陽は昇り　陽は沈む」（屋根の上のヴァイオリン弾き）より
本学学生の役割　サンライズサンセット場面の再現　芝居＆合唱
④ エンディング　出演者全員とともに
放送日　平成26年９月21日(日)　19時30分から21時
再放送　２回

専属アナウンサーの「本日も地元の若い皆さんに番組を盛り上げていただきます。新潟中央短期大学の皆さんです。」という紹介に、会場からは「オー！」という思いがけないどよめきが響いた。また、ミュージカル場面では、NHKが本局のある渋谷から運んだという本格的な衣装ならびにメイクをした上で、厳かな結婚式の場面を再現した。

出演した歌手は有名な石川さゆり、加藤登紀子、上条恒彦等の豪華メンバーで、見ごたえ十分の歌謡ショーだった。その中で、本学学生たちは物おじせず、本学学生たちあってこその舞台だったか、という印象を満員の聴衆に与えていた。NHKに出演するという思いがけない機会を得られたことは、NHKほか関係各位がこれまでの29回の公演実績を評価した結果と受け止めている。

広報活動の一環として、本学Facebookページを通じて本放送日程、状況報告等をアップロードしたところ、その反応として以下のとおりのコメントが卒業生から寄せられた。

「新潟中央短大の卒業生の１人として誇りに思います。プロのエンターテイナーと共演出来たことは、学生の方々にとって、とても貴重で素晴らしい体験であり、一生の宝となっ

たことでしょう。学生の皆様、先生方、お疲れ様でした。放送日を楽しみにしております。」

10　第30回新潟中央短期大学ミュージカル

本取組が30周年を迎えた。始めた当初は、ここまで継続できるとは想像もしていなかったが、一回一回に全力を傾け、幕を下ろすと次回はもっと良いものをといった拡大発展構想に慣性の法則が働き、再び火が付く。何のためにこんな面倒なことをするのかという思いは常にあったものの、他の団体のできないことを可能にする力が新潟中央短期大学にはあると信じた。また、それを信じたからこそ様々な軋轢、葛藤、挫折も乗り越えられた。

このミュージカルに対する協力者や支援者が増える一方、内外からのネガティブコメントも常に在り続けた。そうした状況を、指導教員として常に同胞であり続けた星野健司は、以下のように述べ、本ミュージカルに対する彼自身の所感を見事に締めくくっている。

「ここまで書いてきて奇妙な倒錯した印象が胸を過ぎる。あれだけ激しく稽古に臨み、あれだけ繰り返し議論を重ねて、先生とも、学生にも、対立したり、話し合ったり、粘り強く指導したり、様々な妥協を重ねたりしてきた舞台への情熱は、自らもそのように努力し、振る舞ってきたように見えて、結局古くから舞台芸術に魅入られた人々と同じように、指導教員もまたマリオネットのごとく舞台に操られていただけだったのだろうか。」

(参照「新潟中央短期大学三十年史」)

第30回新潟中央短期大学ミュージカル　平成27年５月10日(日)、16日(土)
創作ミュージカル　「私の大切なもの」

平成26年、第12代学長に就任した石本勝見の後押しを受け、待望の新潟公演が15年ぶりに実現した。それも加茂と新潟という２会場で開催するというこれまでにない大規模なもので、指導教員、学生たちの熱意は否が応にも高まった。新潟会場は、1,500人を収容できる新潟テルサが選ばれた。加茂文化会館の1.5倍の大劇場である。それに合わせて、

指導陣に子ども練習担当として斉木としや、佐藤佳実が加わり、子ども練習は２会場に分散させて行われた。そうした本学の積極的姿勢に呼応するように、参加子ども人数は加茂が66人、新潟が33人の計99人を数えた。

演目は、20周年記念公演で取り上げた本学オリジナルミュージカル「私の大切なもの～マツユキ草の奇跡」を10年ぶりに取り上げた。ただ､先回の作品をそのまま踏襲するのではなく､ヴァージョンアップさせながら以下の制作・上演スケジュールに沿って進められた。

●（制作・上演スケジュール）

平成26年 7月　　演目決定
平成26年 7月　　制作準備委員会発足　総監督決定
平成26年 7月末　台本制作開始
平成26年 9月　　台本完成
平成26年 9月　　音楽制作、
　　音楽練習　ダンス練習開始
平成26年10月　　音楽練習　ダンス練習
平成26年11月　　音楽完成
平成26年12月　　オーディション
平成26年12月末　キャスト・スタッフ決定（一人一役）
平成27年 1月　　部分練習開始　歌レッスン　ダンスレッスン等
平成27年 1月　　子ども練習開始（加茂・新潟）
平成27年 2月　　シーンごと、及び通し練習開始
平成27年 3月　　シーンごと、及び通し練習　歌、ダンスレッスン
平成27年 4月　　通し練習を中心とした手直し
平成27年 4月　　舞台での場当たり
平成27年 5月　　舞台練習　ダメだし
平成27年 5月 9日（土）　加茂文化会館でのリハーサル
平成27年 5月10日（日）　加茂文化会館での公演
平成27年 5月15日（金）　新潟テルサでのリハーサル
平成27年 5月16日（土）　新潟テルサでの公演

●(30周年記念ミュージカルテーマ)

筆者が本ミュージカルの主体である学生たちに「皆さんにとって一番大切なものは何ですか」という問いかけから演目が決定され、それがそのまま本ミュージカルのテーマに結びついた。とかく、「金銭」「物」に対する執着心の強い現代において、学生たちの出した答えが「家族」である。そして、それは主人公ナーチャによって歌われる以下のセリフと歌に凝縮されている。

「私の一番大切なもの、この世で一番大切なもの、、、
青い瓦の大きなお家？　　いいえ　違う　そうじゃない。
帽子、毛皮のコート？　　いいえ　違う　そうじゃない。
私の一番大切なもの、この世で一番大切なもの、、、それは、赤い毛糸でできた
かわいい　ちっちゃな　ボンボンついた　　母さん　こさえた　暖かな手袋！」

「家族」というテーマ設定は、古くから現代においても新鮮なテーマとして捉えられるが、本学ミュージカルでは学生170人、地域（加茂市、新潟市）の子どもたち99人とともに新しい角度から表現できたのではないかと総括している。

最後に、終演後、主人公のナーチャ役学生が語ってくれた一言に筆者の心が動かされたことを記述することで、この30年史を閉じたいと思う。

「あなたのお父さん、お母さんは、あなたの舞台を見て何か言ってましたか。」という筆者からの問いかけに対する彼女の答えは、以下の一言を述べただけだった。

「お父さん、泣いてました。」と。

11　あとがき

30年間の取組の記録を一回ごとにまとめてみたところ、多分に回想録的な性格を帯びてくるのはやむを得ないと思う。しかし、その歴史を通じて筆者が得たものは、教育の本質に通ずるものがあったと確信している。

重複するが、私たちがこの取組を通して重要視していることは、プロの劇団が目指す完成度の高い舞台という結果ではなく、学生たちが他者との関わりを通して人間的に成長していくプロセスにある。述べてきたように、30回の歴史の中で問題のない年はなかった。毎年の制作過程の中で、学生、教員に関わらず誰もが何度か深刻な葛藤や挫折を経験した。それが表出したことによって、上演できるかどうかの危機も数え切れなかった。しかし、そうした隘路にあっても学生たちのエネルギーとチームワークは困難を乗り越え、より一層の感動を体験することができた。一方、この取組を通して筆者自身が学んだこともはかり知れない。67歳ともなれば学生指導に関して十分に熟知していなくてはならないはずであり、そのつもりではあるが、実際は決してそうではなかった。学生一人ひとりの数だけ私自身に問題があったように思う。創造することの難しさ、教育の奥深さ、自身の無力感等にさいなまれ続けたというのが偽らざる心境である。しかし、そのつど自分の狭い世界観・価値観とは違った考え方、見方を他の分野・領域の教員ならびに多数の学生たちから教えられた気がしている。そうしたおかげで現在の自分があると思っている。

（参照「第５回ベルカントの夕べ　寺川悦男リサイタル」プログラムから）

第30回まで青息吐息で幕を閉じることができたのは、まさに僥倖の一言である。本取組を陰に日向に支えてくれた諸兄に対して感謝の言葉を知らない。しかし、これで終わりではない。終われば次が待っている。第31回目のミュージカル制作はすでに始まっている。演目は新しい門出に相応しく、これまで取り上げなかった中短創作ミュージカル「白雪姫」（第２回の同名オペレッタとは全く別の作品）を学生たちは選択した。台本も音楽も何もかも決まっていない。その点において、漠然とした不安を抱いているが、これも新しい一ページの始まりと思うと、体中に闘志がみなぎってくる。

定員も100人と増員され、新校舎の完成も間近に控えている。常に存在した障害も、妄想と片付けるには重すぎる条件が控えている。それでも立ち止まることは考えていない。学生たちの本取組にかけ

る思いは増すばかりである。地域の子どもたちも来年の舞台を待っている。これまで同様、数々の試練を乗り越え、為すべきを為す、という姿勢を崩すことはないだろう。また、そうありたい。新たなる学生の輝く笑顔と感動する姿を見るために。

参　照

1　新潟中央短期大学三十年史
2　平成15年度「特色ある大学教育支援プログラム」申請書（後述）
3　「第４回ベルカントの夕べ　寺川悦男　還暦記念リサイタル」 プログラム
4　「第５回ベルカントの夕べ　寺川悦男リサイタル」 プログラム
5　新潟中央短期大学ホームページ内のバナー 「中短ミュージカル」
6　新潟中央短期大学ホームページ内のバナー 「Face book」
7　You Tubeアップロード　http://youtu.be/yohszT4IEYU）
- 「中短ミュージカル名場面集１」から「中短ミュージカル名場面集29」
- 「中短ミュージカルエンディングテーマ　再び会える日」
- 「中短ミュージカルオープニング集」
- 「中短ミュージカル　ヘンゼルとグレーテル挿入歌　カラスのタンゴ」
- 「中短ミュージカル　私の大切なもの」

12　参考文献　「特色ある大学教育支援プログラム」申請書

取組の内容について①　申請題目「総合学習としてのミュージカルの制作と上演」

（概要）　この教育活動は、単なる芸術教育の領域にとどまらず、学生の保育・幼児教育に関する知識・理解の深化を促進すると同時にその人格的成長に大きな教育効果を挙げているという視点から、その概要を記述する。

（趣旨）　本学では、昭和61年以来「新潟中央短大ミュージカル」の呼称で、毎年学生主体の芸能発表会を開催している。この発表会のプログラムは、「ミュージカル」と「リズム体操」を二本の柱として構成し、前者を２年次生が、後者を１年次生が演ずるという形式で行われている。いずれも学生全員がそれぞれ何らかの役割を分担して参加するという全学態勢を最大の特色としている。「ミュージカル」は保育に関する総合学習の場として設定したものである。世界の名作や創作シナリオのうちから学生全員で一つのミュージカル作品を共同制作することによって、幼児の心性、行動心理に関わる知識理解を体験的に

深め、保育者としての実践的指導力を高めようとするねらいのものである。特に平成13年度からは、教育職員免許法の改正に伴って新たにカリキュラムに加えられた「表現活動指導法」の授業をこの教育活動の基盤として行っている。

（状況） 上演会場は地元の加茂文化会館（収容人員1,000人）か、新潟市民芸術文化会館劇場（収容人員750人）のどちらかを舞台に、入場無料で発表し評価を仰いでいる。

来場者の構成は、地域の子どもたち、その両親、一般市民、学生の保護者、本学の卒業生、など老若男女様々である。また、上演に際しては市の教育委員会、公共放送局、新聞社等の後援を得ており、マスコミ各機関から、その制作過程や反響を好意的に報道していただいている。その結果、近年の来場者は常に1,000人を超えており、地域社会から好評を頂戴している。また、学生に対する教育効果も期待以上のものがあって今日では本学の欠かせぬ大行事であり、創造的な教育活動になっている。

上演所要時間は、「ミュージカル」が約１時間半、「リズム体操」が20分、そしてその間をつなぐ「ぬいぐるみショー」や休憩をはさみ、全体で２時間強である。

（評価） 予算は上演会場によって200～300万円を充てている。本学のように小規模短大の行事としては、人的物的負担は軽くない。しかし、逆に、少数だから実現できているとも言える。授業中に見出せなかった、学生たち一人一人の潜在能力の発見、行事が成功することによって導かれる感激や帰属意識の高まり、自信と誇りの深まり等の教育効果は何ものにも代えがたいと評価している。

ここ数年、このミュージカルに対する学生アンケートに多く見られる次の一言は、私たちに教師冥利に尽きる思いを抱かせる。「この短大に入れて本当に良かった。こんなに私たちを熱中させ、こんなに熱心に私たちを指導してくださる学校はほかにはないと思う。」

取組の内容について②（企図した理由）

「新潟中央短大ミュージカル」は、本学の保育者教育の成果を公開し、地域社会との関係を一層親密にする趣旨で始めた学校行事である。始められた昭和61年当時、学生たちの短大生活は授業の単位取得を中心に小さくまとまり、学校の教育活動全体としてもう一つ盛り上がるものが感じられなかった。そこで彼らの情熱をかき立て、熱中させるような芸能行事を啓発して短大を活性化させたかった。これが企図した理由であった。しかし具体的にどのようなものをどのような形で作っていくかは試行錯誤の連続であった。そもそも、その当時幼児教育科を持つ短大の芸能の学外発表はどうあるべきなのか、どこかに参考になるものがあったわけではない。また、あらかじめ文化活動のありかたについての議論が存在し、それに沿って作り上げられたわけでもなかった。むしろ、幼児教育科を持つ、当時において新生の私立短大である本学が、対外的な話題づくりや地域との結びつきを深めたいという意志のもとに出発したというのが実情であった。

（特色） この活動の特色は次の２点に要約される。

第１は、これが全教員学生をあげての取組になっている点にある。２年制の幼児教育系短期大学においては、履修科目数、実習等の関係もあり時間的な余裕もなく、これだけの本格的規模のステージを完成させるには、全学をあげての体制づくりが必要だからである。役割分担については学生の自主的な決定と実行に委ね、教員は助言者に徹している。練習・制作過程では、教科主義ではなく全教員がそれぞれの領域にとらわれず学生と一緒に議論を重ねながら完成度の高い舞台を作り上げていく。学生はその現場に加わることで「創造すること」の真の意味を実感することにより実践的指導能力を高め、幼児教育の現場でそれを生かすことができる。学生の人間的成長に多大な教育効果をもたらしているのである。

第２は、このミュージカルが過去18回の上演をとおして、単なる学校行事ではなく地域と密接に結び付いた文化、芸術イベントとして定着し評価を得ていることがあげられる。近年では加茂市内の小中学校の総合学習の担当教員から、ミュージカルの制作・練習現場を見学する体験学習の協力依頼も受け、実現している。また、来場者による公演後のアンケートを見ても「素晴らしかった。来年も観に来たい。楽しみにしている。」というような感想を頂いている。そうした声を参考に、平成15年の第18回公演では、地域の子どもたち30人との共演も実現し、学生との交流もますます深められている。このミュージカルを通じて、地域の方々は本学を教育熱心な短大と好意的にとらえており、また、彼等とのコラボレーションの成果は本学が地域に根ざしているという証でもある。

18年前に始めた時は、観客である子どもたちにどのような出し物を提供できるか試行錯誤の連続であった。合唱、合奏、独奏や紙芝居、劇、などを舞台にのせてはみたものの観客である子どもたちの反応はもう一つ盛り上がりに欠けた。プロの集団ではない学生たちが演ずるわけなので、意欲と若さはあるものの、技術的に拙いところもあり、観客である子どもたちに表現するものが伝わらなかったとしても無理からぬところであった。そうした中で第２回目からプログラムに加えられたミュージカルの面白さは、演ずる学生たちと鑑賞する子どもたちの心をとらえた。歌や踊り、舞台美術や照明は素晴しい劇場での臨場感を伴い、多くの観客からの温かい拍手と声援を受けつつ現在に至っている。

（将来の展望）「加茂市の誇りだ！」とまで言ってくれる支援者がいるほど地域社会に定着しており、そうした周囲の期待とともに今後も全学の力を結集しながら毎年続けていかねばならぬ教育活動である。また、こうした地域の声に応えることが宿命になっている現在、将来の展望については学内において種々の議論を重ねている。例えば、平成15年に実現をみた幼児、児童との共演を今後どのように継続させるか。また、市民一般公募によるシナリオや、地元に伝わる民話を素材にしたオリジナルストーリーのミュージカル化なども考えられている。上演内容については、舞台機能を一層生かしながらより完成度の高いものを目指したい。また、年々増加する来場者数に対応するための２回公演や、このミュー

ジカルの地元開催を要請している近隣市町村の舞台にも載せたい。しかし、このような新規の可能性を追求するには、当然のことながら予算の増額も考ずる必要がある。

組織的対応について（理念・目的との連関性、決定プロセス、実施、支援体制）

この取組と本学の理念・目的との連関性については、「豊かな知性と情操、積極的な奉仕精神と実践力、地球社会、我が国及び地域社会の福祉に貢献する人材の育成」という本学の教育目的、目標に文字どおり合致しており一定の実績をあげている。

この教育活動の決定プロセス、及び組織的対応に関しては、いずれも本学における意志決定手続きを経て決定され実施されてきた。すなわち、月例の幼児教育科教員による学科会議において提案、付議され、成案を得たのち教授会における審議を経て決定されている。

この行事における部門及びそれぞれの係の内容は下記のように多岐にわたっている。これらの役割は教職員、学生全員が分担しながら実施している。

予算については会場費、広報活動費、印刷費、郵送料、制作費、委託手数料、運搬費等、200～300万円で全額を短大経費の中から支出している。

本学で制作・上演するミュージカルは、芸術的と言う観点からは音楽大学、芸術大学のオペラ等とはいささか趣が異なっている。つまり、このミュージカルは、すべてのものを創造した上で、観客にとって親しみやすく、楽しく、それでいて心を揺り動かすような深みを兼ね備えたものを目指しているからである。学生は、集団の中で自分に与えられた役割を自覚しながら、観客の反応を想定した構成と技法を、試行錯誤を重ねながら追求する。これはそのまま保育士に求められる思考、能力、技法に結び付くことになる。

取組実績について（学生がこの取組から受けた学習上の利益、この取組の当初目標とした教育効果並びにその目標を達成するための努力の状況等）

本学幼児教育科を卒業する学生に「在学中いちばんの『思い出』は何ですか。」と問えば、十人が十人「それは何といっても『新潟中央短大ミュージカル』です。」と決まった答えを返してくる。このように本学のミュージカルは、今日、全学生の脳裏に鮮烈な印象を焼き付けている伝統行事である。そのミュージカルも過去18回の歴史の中で決定プロセスや練習、制作の過程をとおして、指導する教員と出演する学生たちはそれぞれに何度か大きな挫折を経験した。上演できるかどうかの危機もあったが、そのつど学生たちのエネルギーと教員の熱意はそれを凌駕し、このミュージカルに関係する全員がより一層の感動を体験することができた。「舞台は人生だ」と言った人がいたが、まさにそのとおりで、涙、笑い、怒り、喜びそして挫折を私たちは感ずることができた。こうした経験は机の上だけで学べるものではなく、私たちはそれを誇りにしている。ご来場いただいた地域の子どもたちには劇場で観る生の舞台のおもしろさを感じていただき、演ずる学生たちには生涯にわたる

思い出と達成感を、そして指導する教員には若々しい学生たちとの共同制作の過程と発表の場で学生一人一人の新たな息吹と大きな可能性を見出して来た。

この教育活動がもたらした意味は三つある。その第１は、もしそれがなければ発現しなかったであろう学生一人一人の潜在的能力を引き出すことに成功したことである。役割分担の自主・自治が見事に適材適所を実現していることは驚くばかりである。つまりそれは、チームワークの積極的学習である。制作過程においてスタッフやキャストはそれぞれのチームごとの自治による運営に任せている。その結果、一人一人の学生に責任感と仲間との連帯感を生じさせ、自己と他者との人間関係づくりを学ばせることができている。第２は、自助努力によって困難を乗り越え、連帯関係のなかで自分の役割を果たした体験が学生一人一人に生涯に及ぶ感動を生み出していることである。学生にとって「新潟中央短大ミュージカル」は本学在学中の最高の思い出として心に刻み込まれていく行事になっている。第３は、教員と学生との人格的ふれあいである。とかく、個々の授業を中心とした専門的知識、技術の場に限られることの多かった両者の関わりが、ミュージカルを介して相互の人間的理解を促す効果をもたらした。本学が地域からアットホームな大学としての印象を与えているのは、ただ単に小規模校という環境、物理的条件からではなく、ミュージカルの成果に負うところが大きい。